今とむかし

沖縄県立宮古高等学校　二年
下地　涼香

空はいつも　青かった
海はいつも　輝いていた
風はいつも　心地良かった
島にはいつも　笑い声が響いていた
こんな日が　来る事も知らず
嵐は突然やってきた
戦争という名の　残酷な嵐が
足音すらも立てず　南の島へ
嵐は　重い鉄の大雨を降らせた
鉄の風を吹きつけた
必死で逃げるわたし
恐怖でふるえるわたし
壕の中でじっと息を殺すわたし
おなかが空いて　食べ物を探し回るわたし
爆音や怖さで　眠れないわたし
家族を失い　悲しみに泣き叫ぶわたし
あの惨劇から六十九年経った今
必死で逃げるわたしは　いない
恐怖でふるえるわたしは　いない
壕の中でじっと息を殺すわたしは　いない
おなかが空いて
食べ物を探し回るたしは　いない
家族を失い　泣き叫ぶわたしは　いない
しかし　それが現実にあったむかし
沢山の命が　一瞬にして奪われた　あの日
忘れ去りたい　あの現実を
私たちは　忘れてはいけない
語り継ぐ者として
精一杯　生きていく義務がある
六十九年前
これは決して　遠い過去ではない
沖縄の空には
まだあの時のように
戦闘機が　大きな音を立てて飛んでいる
戦争が残した傷跡は

今も尚
島の人の心に深く刻み込まれている
平和に見える　今日も
密かに　島の人々の心は戦っている
消えることのない　傷跡と
二〇一四年
空は今日も　青い
海は今日も　輝いている
風は今日も　心地良い
島には今日も　笑い声が響いている